

## 〈資料〉

## スポーツ実技実習の授業評価および指導に関する研究

—J大学スキー実習を対象として—

中村 充\*・伊藤 政男\*\*・東根 明人\*\*\*

## Research on the class evaluation of the sports exercise practice

—Targeting J-university skiing practice—

Mitsuru NAKAMURA\*, Masao ITOU\*\* and Akito AZUMANE\*\*\*

## Abstract

We researched about the exercise subject of the university. It is that on the class evaluation which a university student and a leader do. The investigation object was J-university skiing practice. Then, it was examined about the way of instructing it with the method with the class. We got the result given next.

- 1) The purpose of a student's taking skiing practice is because it felt a charm in the contents of the skiing activities. The motive is a very fine thing to do physical education learning. We think that the meaning of the choice system class is greatly reflected on the motive.
- 2) Student's program evaluation was difference with the thing before the practice and the thing after the practice. Particularly after the practice, the evaluation of the practice by the group of the form that a learning desire is filled was high. Then, evaluation of the freedom learning program that occasion for the charming class and a point gathered was high.
- 3) As for the student's evaluation, there was a difference in evaluation by each viewpoint by the skill group. The student of the beginner class group was evaluated specially high about "fun" "result" "friend".
- 4) As for the intermediate class group, correlation showed a tendency of being poor about taking lecture student's and leader's evaluation by the viewpoint. We think to have need to ask to each other about leader's and taking lecture student's goal.

## I 緒 言

複雑化した現代社会において、スポーツの意義も多様化している。1964年に International Council of Sport and Physical Education はスポーツの定

義を、①スポーツは遊戯の性格を持っていて、自己との競争、または他者との競争、あるいは自然の障害との対決を含む身体運動である、②競争として行われた場合には、スポーツマンシップに則って行われなければならない、フェアプレイに欠ければ、真のスポーツはあり得ない、③これらに規定されたスポーツは、体育の一手段である、としている。つまりスポーツは、単なる身体運動の一手段としてのみ扱うのではなく、心身を育むための体育活動として捉えなければならない。特に学

\* 剣道研究室

Seminar of Kendo

\*\* 体操競技研究室

Seminar of Artistic Gymnastics

\*\*\* ハンドボール研究室

Seminar of Handball

校体育においては、各スポーツ種目の特性に応じて様々な教育の手段として用いられている。そのなかで、大学における体育実技は、生涯にわたるスポーツ習慣の形成および定着化を図る動機付けという重要な役割をも担うと考えられる。さらに平成12年8月の保健体育審議会答申では、スポーツ振興施策の展開方策として生涯スポーツ社会の実現を掲げ、大学は施設、人材等の面でスポーツに関する豊富な資源を有している機関として期待されている。

平成3年6月には、各大学が自らの教育理念・目標に基づいてカリキュラムを自由に編成できるよう、従来的一般教育科目、専門教育科目等の科目区分等を廃止するとともに、単位の計算方法や授業期間等の基準弾力化など、大学設置基準の全面的な改正が行われた。そして、大学の自由度が大きくなった反面、教育の質の向上のため、自己点検・評価や学生による授業評価が要求されている。しかし、平成10年10月の大学審議会答申において、その現状は形式的な評価に陥り教育活動の改善に十分に結びついていないという指摘がされている。

体育授業の評価法については小中学生を中心とした、生徒側からの授業評価を長期の学習成果で評価する方法<sup>8)11)</sup>、一授業時間の学習活動を評価する形成的評価法<sup>10)</sup>、授業観察や教師行動の観察から体育授業の評価を分析した研究<sup>12)</sup>、および動機づけと体育授業場面の目標志向性についての研究<sup>2)</sup>などがみられる。しかしそこには大学生を対象とした研究報告、および学生と指導者の評価の関連について言及した報告はあまり見当たらない。

そこで本研究は、大学における選択制の集中授業形態で行われる野外スポーツ実技実習を対象に、受講学生と指導者双方の授業評価について分析し、実習の在り方や指導に関する一助を得ることを目的とした。

## II 方 法

### 1) 調査対象

調査対象は、J大学で選択必修科目に位置づけ開講されているスキー実習科目の受講学生126名

(体育系学部61名、医学系学部65名)とした。なお受講者については、年度当初に履修登録した学生全員に対し実習2ヶ月前に参加説明会を開催し、実習目的や内容の説明を行ったうえで再度、受講確認がされた学生である。

実習班は両学部とも技能別に約10名程度ずつ8班に分けられ、上級班(第1~3班)、中級班(第4~5班)、初級班(第6~8班)という分類にて実習が行われた。以下、上級群、中級群、初級群とする。

指導者については、実習期間を通して班別指導を行った延べ16名の指導者を対象として調査を行った。

### 2) 実習概要

実習は学部ごとに5泊6日の日程で(2001年1月7日~12日および18日~23日)山形市蔵王温泉スキー場で行われた。ともに積雪量は160~180cm、天候に大きな崩れは無く晴れまたは曇りの天候が多く、実習を行うには非常に安定した条件であった。宿舎はスキー場中腹にあるホテルを利用した。表1は実習期間の日程を示したものである。

### 3) 調査期日

受講学生に対しては、実習の約1ヶ月前に大学内にてオリエンテーションを行い、日程やプログラム内容等を実習手帖ならびに前年度の実習で作成したビデオ画像を用いて説明し、その後に実習前の調査を行った。

実習終了後の調査は、学生ならびに指導者ともに実習最終日の朝食後に一斉に行った。なお受講学生ならびに指導者に対しては、本調査が単位評価などとは無関係であることを説明し、感じたままの回答・評価をするよう促した。

### 4) 調査票の作成ならびに調査内容

表2は今回の研究で使用した調査票を示したものである。

① 実習前調査(受講学生のみ)…実習の履修目的(14項目)と、期待されるプログラム(10項目)について、それぞれ順位をつけて3つ選ばせた。

② 実習後調査(受講学生および指導者)…受

表1 実習の日程

第一日	現地集合 → 移動 → 昼食 → 開講式 → 実習班分け・班別実習 → 夕食 → スキー医事講義	pm 2:00	2:15~4:00	7:30~8:30	
第二日	班別実習 → フリー滑走・昼食 → 班別実習 → フリー滑走 → 夕食 → ナイター滑走	am 9:30~11:30	pm 1:30~3:30	3:30~5:00	7:00~9:00
第三日	班別実習 → フリー滑走・昼食 → 班別実習 → フリー滑走 → 夕食 → ナイター滑走	am 9:30~11:30	pm 1:30~3:30	3:30~5:00	7:00~9:00
第四日	班別実習 → フリー滑走・昼食 → 班別実習 → フリー滑走 → 夕食 → ツアー講義	am 9:30~11:30	pm 1:30~3:30	3:30~5:00	7:30~8:30
第五日	体験スキーツアー → フリー滑走・昼食 → バッジテスト・フリー滑走 → 夕食 → ナイター滑走	am 8:30~12:30	pm 1:30~5:00	7:00~9:00	
第六日	班別実技テスト → 閉講式 → 移動 → 現地解散	am 9:30~10:30	10:30		

表2-1 実習前の受講学生用調査内容

Q	受講目的についてお答えください(順番をつけて3つ選んでください) a. 雪(自然)と接したいから b. スキーがうまくなりたいたいから c. 合宿体験をしたいから d. バッジテスト受検のため e. 経費が安いから f. スキー場やホテルに魅力を感じるから g. スキーを楽しみたいから h. 友達との思い出を作りたいから i. 先輩などの情報で楽しそうだから j. 友人に誘われた(誘った)から k. 知っている教員が多いから l. 高い技術を教えてもらえるから m. 単位取得のため n. その他 ( )
Q	実習内容に対し期待されるプログラムを選んでください(順番をつけて3つ) a. 行き帰りの旅程 b. ホテルでの生活 c. 班別実習 d. 講義(スキー医事) e. 講義(ツアー) f. フリー滑走 g. ナイター滑走 h. 体験スキーツアー i. バッジテスト j. 実習全体を通した達成館
Q	実習に対し不安に感じていることがあればお答えください(自由回答) (寒さ・けが・指導者・共同生活・技術・用具 他など)

講学生に対しては、実習後良かったと感じたプログラム(10項目)に順位をつけて3つ選ばせた。また、高橋ら<sup>11)</sup>が作成した「楽しさ」「成果」「仲間」「先生」の4観点で構成される体育授業診断法をもとにし、さらに宇土ら<sup>13)</sup>が7観点到構成分類した中から「施設・用具」を、本研究では環境整備・運営全体を含めた「マネージメント」として加えた。つまり、「楽しさ」「成果」「仲間」「指

導者」「マネージメント」の5観点構造で28項目からなる授業評価調査を学生用として作成し、4段階評価にて回答を行わせた。同様に指導者用として学生用調査票の各項目に対比するよう26項目からなる調査票を作成し、4段階評価にて回答を行わせた。

表2-2 実習終了後の受講学生用調査票

Q 下記の問いに4段階に分けて当てはまる番号を○で囲んでください	おおいに そう思う			
	やや そう思う	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	
1. 今まで以上、あるいは違った形で精神・身体的に自信が得られた	4	3	2	1
2. スキー実習は楽しかった	4	3	2	1
3. 指導者は学生の要望に応える姿勢があった	4	3	2	1
4. 他人に迷惑をかけないよう生活が行えた	4	3	2	1
5. 実習プログラムは適切だと思う	4	3	2	1
6. 実習中は快い興奮があった	4	3	2	1
7. 思わず拍手したり、歓声を挙げるがあった	4	3	2	1
8. スキー場への移動手段は楽である	4	3	2	1
9. 共同生活のマナーや基本的な生活習慣などが身に付いた	4	3	2	1
10. 指導者は適切な助言を積極的に与えていた	4	3	2	1
11. 生涯にわたってスキーを楽しみたい	4	3	2	1
12. 現地集合、現地解散は適切だと思う	4	3	2	1
13. 友達同士教え合うことがあった	4	3	2	1
14. 指導者は熱心であった	4	3	2	1
15. お互い助け合ったり注意し合ったりした	4	3	2	1
16. 複数人による実習あるいはツアーは楽しかった	4	3	2	1
17. 指導は理解しやすかった	4	3	2	1
18. 積極的にスキーを行なった	4	3	2	1
19. 友人と楽しい時間を過ごせた	4	3	2	1
20. 宿舎には満足した	4	3	2	1
21. 宿舎の部屋では友人と楽しく過ごせた	4	3	2	1
22. 精一杯頑張ったという満足感がある	4	3	2	1
23. スキー技術はおおいに上達した	4	3	2	1
24. スキー場には満足した	4	3	2	1
25. 実習班の仲間とは楽しく過ごせた	4	3	2	1
26. 滑り方だけではなく、その基本となる理論が理解できた	4	3	2	1
27. 指導者の人柄は近づきやすく親しみやすかった	4	3	2	1
28. 深く心に残ることや、感動があった	4	3	2	1
Q 本実習で良かったプログラムを選んでください(順番をつけて3つ)				
a. 行き帰りの旅程 b. ホテルでの生活 c. 班別実習 d. 講義(スキー医事) e. 講義(ツアー)				
f. フリー滑走 g. ナイター滑走 h. 体験スキーツアー i. バッジテスト j. 実習全体を通した達成感				
Q 本実習で良くなかったプログラムがあったらQ2の項目から選んでください(複数回答可)				

表 2-3 実習終了後の指導者用調査票

Q 下記の問いに4段階に分けて当てはまる番号を○で囲んでください				
	おおいに そう思う	やや そう思う	あまりそう 思わない	全くそう 思わない
1. 熱心に指導が行えた	4	3	2	1
2. 学生同士教え合う態度もみられた	4	3	2	1
3. 学生はいきいきとしていた	4	3	2	1
4. 実習プログラムは適切だと思う	4	3	2	1
5. 他人に迷惑をかけない態度が伺えた	4	3	2	1
6. 実習班の学生に積極的に指導を行ったと思う	4	3	2	1
7. 学生は帰りの基本となる理論が理解できていた	4	3	2	1
8. 学生はスキーを楽しんでいた	4	3	2	1
9. 実習班の学生と楽しく過ごすことが出来た	4	3	2	1
10. 実習により精神的・身体的成長が感じられた	4	3	2	1
11. スキー場への移動手段は豊富でアクセスは良い	4	3	2	1
12. 指導の準備は十分であった	4	3	2	1
13. 学生は積極的にスキーを行っていた	4	3	2	1
14. 学生同士お互い助け合ったりしていた	4	3	2	1
15. 学生は今回の実習を楽しんでいた	4	3	2	1
16. 現地集合、現地解散は適切だと思う	4	3	2	1
17. 思わず拍手したり、歓声を挙げるがあった	4	3	2	1
18. 学生には深く心に残ることや、感動があったと思われる	4	3	2	1
19. 蔵王スキー場は本学の実習地に適している	4	3	2	1
20. 学生は精一杯頑張った満足感を感じている	4	3	2	1
21. 学生の要望に応える事が出来たと思える	4	3	2	1
22. 学生のスキー技術はおおいに上達した	4	3	2	1
23. 本宿舎は実習に適していた	4	3	2	1
24. 実習班は和気あいあいとしていた	4	3	2	1
25. 実習班の仲間同士楽しく過ごしていた	4	3	2	1
26. 共同生活のマナーや基本的生活習慣などが身に付いた	4	3	2	1

### Ⅲ 結 果

#### 1) 受講学生の履修目的

表3は、受講学生それぞれが履修目的として挙げた3項目を単純加算集計して、技能群別の上位

多数8項目について回答数を示した。さらに受講学生それぞれが挙げた3項目の目的には順位がつけられており、そのうち1番目順位として挙げられた項目のみを累計した回答数を示した。

二元配置の分散分析を行った結果、全体総計の

表3 技能群別の履修目的回答

受講目的	上級群 (n=55)		中級群 (n=37)		初級 (n=34)	
	回答総計(%)	1 番目(%)	回答総計(%)	1 番目(%)	回答総計(%)	1 番目(%)
スキーを楽しみたい	35(21)	19(35)	28(25)	10(27)	24(24)	5(15)
スキーがうまくなりたい	26(16)	12(22)	28(25)	13(35)	22(22)	11(32)
単位取得のため	36(22)	10(18)	16(14)	3( 8)	16(16)	7(21)
友達との思い出作り	18(11)	3( 5)	19(17)	5(14)	18(18)	6(18)
雪と接したい	7( 4)	4( 7)	4( 4)	1( 3)	9( 9)	4(12)
先輩情報で楽しそう	8( 5)	2( 4)	4( 4)	3( 8)	8( 8)	0( 0)
バッジテスト受験	13( 8)	4( 7)	2( 2)	0( 0)	0( 0)	0( 0)
高い技術習得のため	7( 4)	1( 2)	4( 4)	2( 5)	1( 1)	1( 3)
その他	14( 9)	0( 0)	6( 5)	0( 0)	4( 4)	0( 0)

※二次配置分散分析  
〔総計〕技術群間 P<0.05

表4 技能群別のプログラム内容の評価回答

プログラム内容	上級群 (n=55)		中級群 (n=37)		初級 (n=34)	
	実習前(%)	実習後(%)	実習前(%)	実習後(%)	実習前(%)	実習後(%)
班別実習	26(15)	46(27)	12(11)	30(27)	9( 9)	30(29)
ナイター滑走	23(14)	21(13)	21(19)	24(22)	19(19)	22(22)
体験スキーツアー	13( 8)	18(11)	16(14)	16(14)	10(10)	15(15)
フリー滑走	39(23)	19(12)	22(20)	14(13)	16(16)	11(11)
実習の達成感	19(12)	20(12)	12(11)	12(11)	15(15)	9( 9)
ホテルでの生活	19(12)	17(10)	11(10)	10( 9)	13(13)	8( 8)
バッジテスト	12( 7)	23(14)	7( 6)	2( 2)	3( 3)	3( 3)
その他	14( 9)	1( 1)	10( 9)	3( 3)	17(17)	4( 4)

※ $\chi^2$  独立性の検定 (1×m 分割表)  
〔総計〕上級群-中級群間: P<0.05  
上級群-初級群間: P<0.05

技能群間には有意な差(分散値130, 分散比6.4,  $p<0.05$ )がみられた。しかし目的の1番目のみでは技能群間に有意な差はみられなかった。総計において中級群と初級群では、「スキーを楽しみたい」「スキーがうまくなりたい」が上位を占め、一方、上級群では「単位取得のため」が最も多い回答数であった。ただし、上級群でも1番目とし

て挙げられた目的回答は「スキーを楽しみたい」が最も多い回答数であった。

## 2) 実習プログラムに対する期待・評価

表4は、受講学生が実習前に期待されると感じたプログラムと、実習後に良かったと感じたプログラムについて、それぞれ挙げられた3項目を単純加算集計し、上位多数7プログラムの技能群別

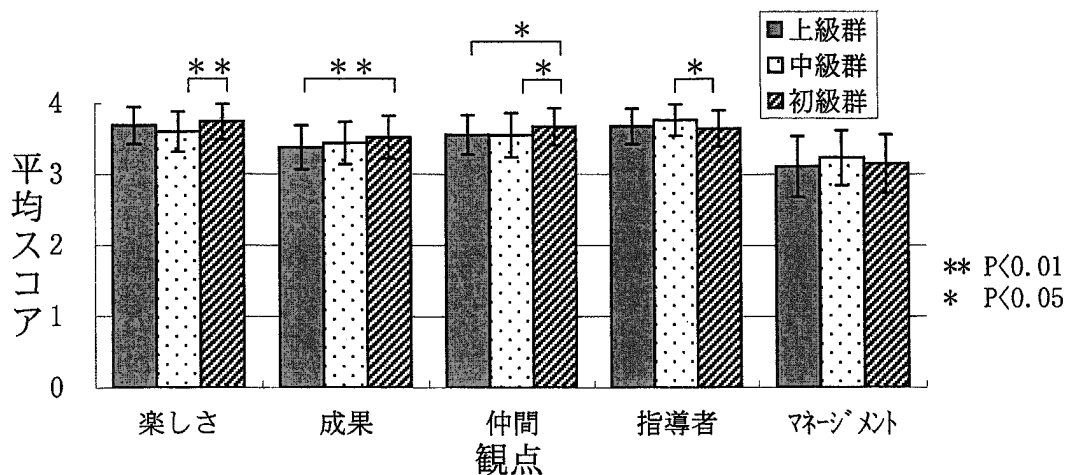


図 1-1 受講学生による観点別評価平均スコア

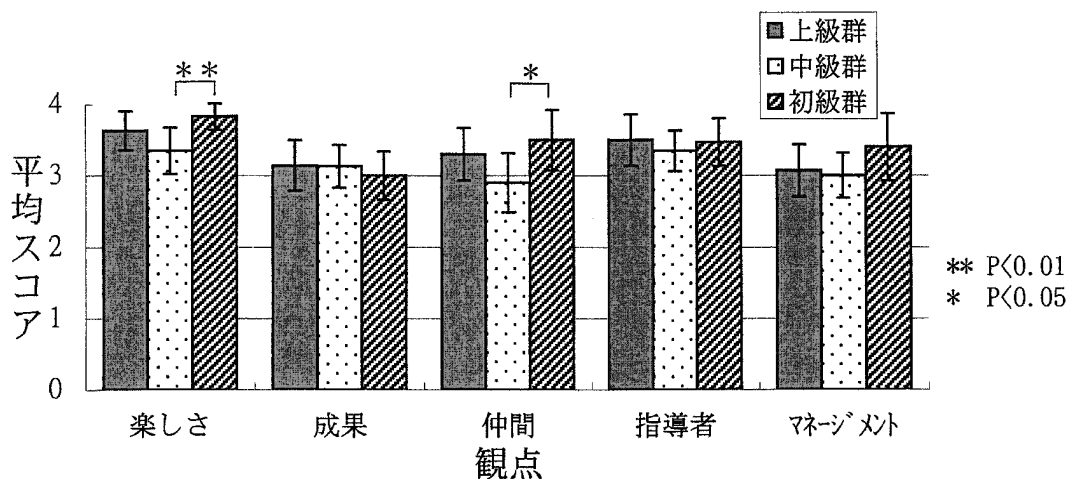


図 1-2 指導者による観点別評価平均スコア  
図 1 各技能群の観点別評価平均スコア

順位を示した。

$\chi^2$  独立性検定を行った結果、実習前のプログラムに対する期待回答は技能群間に有意な差はみられなかった。実習後の評価回答については、上級群-中級群間 ( $\chi^2$  値17.0,  $p < 0.05$ )、上級群-初級群間 ( $\chi^2$  値16.8,  $p < 0.05$ ) に有意な差がみられた。実習前には全技能群で「フリー滑走」「ナイター滑走」が最も期待されるプログラムとして挙げられたが、実習後は「班別実習」が全技能群で

最も良かったプログラムとして評価され、次に「ナイター滑走」が挙げられた。また上級群では「バジテスト」の評価が実習前より非常に高くなったが、他の技能群では実習前後の調査でほとんど挙げられていなかった。中級群および初級群では「体験スキーツアー」の実習後評価が高かった。

### 3) 5 観点構造からみた授業評価

図 1 は、実習後に調査した受講学生と実習班指

導者による、観点ごとの評価平均スコアを示した。

受講学生では、「楽しさ」においては初級群が中級群より有意に評価が高く、「成果」においては初級群が上級群より有意に評価が高い。「仲間」においては初級群が上級群および中級群より有意に評価が高く、「指導者」においては中級群が初級群より有意に評価が高い結果がみられた。

指導者では、「楽しさ」において初級群が中級群より有意に評価が高く、「仲間」においても初級群が中級群より有意に評価が高い結果がみられた。

#### 4) 受講学生と指導者の評価相関

表5は、受講学生と実習班指導者による各観点ごとの評価の相関係数を示した。技能群別にみると、「楽しさ」については各技能群とも強い相関がみられた。「成果」については、上級群では強い相関がみられたが、中級群および初級群では上級群に比較してやや弱い傾向がみられた。「仲間」については、上級群および初級群では強い相関が

表5 各観点の受講学生と指導者間の相関係数(技能群別)

観 点	技能群	相関係数
楽 し さ	上級群	0.999
	中級群	0.882
	初級群	0.997
成 果	上級群	0.916
	中級群	0.778
	初級群	0.501
仲 間	上級群	0.955
	中級群	0.449
	初級群	0.968
指 導 者	上級群	0.976
	中級群	0.621
	初級群	0.987
マネージメント	上級群	0.917
	中級群	0.726
	初級群	0.609

みられたが、中級群はそれと比較して相関はやや弱い傾向がみられた。「指導者」については、上級群および初級群では強い相関がみられたが、中級群はそれと比較して相関はやや弱い傾向がみられた。「マネージメント」については、上級群では強い相関がみられたが、中級群と初級群は上級群と比較してやや弱い相関がみられた。

## Ⅳ 考 察

### 1) 実技実習の履修目的

今回の調査で履修目的として最も多く挙げられた「スキーを楽しみたい」および「スキーがうまくなりたい」という理由は、伊藤<sup>3)</sup>が体育の学習動機として位置づけた充実志向と実用志向にあたると思われる。充実志向は、内発的な興味に基づく動機であり、実用志向は、健康や体力の向上における価値を認識しての動機である。いずれも体育内容そのものへの動機で、体育学習においては望ましい動機であることが示唆されている。また、本研究で対象としたスキー実習のねらいは、①スキー技術の向上、②スキー指導方法の理解と実践、③生涯スポーツとしての活用、を主なねらい<sup>4)</sup>として掲げており、開講目的と合致した履修目的が多くみられた。平成10年に告示された新学習指導要領<sup>6)7)</sup>では自らの判断で運動を実践できる能力の育成を重視し、選択制授業の意義が重要視されている。浦井<sup>16)</sup>は、①運動を選択する力量を育てることができる、②運動の学び方を工夫する力量を高めることができる、③運動の実践に関わる競争・達成・克服・表現などの様々な場面での運動の楽しさや喜びをより深く味わうことができるようになるとともに、運動への意欲を高めることができる、といった3点の意義を挙げて、選択制授業は生涯スポーツの教育を推進するうえで大きく貢献するとしている。そしてJ大学カリキュラムでスキー実習は選択必修科目に位置づけられ、受講学生は履修登録後にも実習前にあらかじめ説明会を開催したうえで受講確定しており、受講学生の多くが実習のねらいを理解して参加していることが推測され、結果に大きく起因したと考えられる。



ただし、実習展開にあたり学生に多くのプログラム選択肢を与え、その中から各自で選択したプログラムを組み合わせて実習を構成する形態<sup>1)</sup>もみられ始めている。こういった点を考慮すると、実習プログラムの選択制という形態も視野に入れてさらなる工夫の必要性も生まれてきていると考えられる。

## 2) 実習プログラムに対する評価

プログラムについては、実習前の調査では「フリー滑走」「ナイター滑走」「班別指導」への期待が大きかった。大学生の場合、形式の単調さと模倣の倦怠を嫌うとともにすぐれたスキー技術と科学的基礎にもとづいた理論を強く求める態度<sup>15)</sup>という特性が挙げられており、本調査でも自由に滑ることへの期待感があるとともに、自分の技術レベルを的確に向上させるプログラムへの期待感が表れていると考えられる。

実習後の調査によるプログラム評価の結果については、全ての技能群において「班別指導」への評価が最も高かった。魅力ある授業の条件として「わかる・できる喜びのある授業」<sup>5)</sup>が挙げられるが、「班別実習」は履修目的として最も多く挙げられた「スキーを楽しむ・うまくなる」という点で、受講学生の目的を最も満足させたことが示唆された。つまり、班別指導による技術的進歩が受講学生に「うまくできるようになる喜び」を与え、履修目的に対し満足感を得られた結果と考えられる。今回の実習による班別指導は、技能ごとに約10名の班編成で行われ、チームティーチング方式による中集団別の指導体制がとられていた。したがって、一斉指導方式ながらも、指導者が班員の学生全体に目が行き届くため、大学生の「指導者に対して適切な助言や、より高度な技術あるいは合理的な理論を求める」<sup>15)</sup>態度に対応しやすい体制であったことが班別実習の成果を上げるうえで大きな影響を及ぼしたと推察される。

一方、「ナイター滑走」についても非常に高い評価結果がみられたが、「フリー滑走」については高い評価はみられなかった。加藤ら<sup>5)</sup>は、魅力ある授業の原動力は生徒が意欲的に取り組むためには課題に4要因（興味・関心、明確さ、具体

性、結果）の誘引性が必要であり、さらに授業づくりのポイントとして6つの点を挙げている。両プログラムとも実習前調査結果が示すとおり受講生の期待は高く、内容に関しても受講生の自由滑走であるため誘因性は同様に整っていたと考えられる。しかし、「フリー滑走」は班別実習の滑走と同じ環境条件であるのに対し、「ナイター滑走」は普段経験することが少ない昼間とは異なる自然条件（ナイター、昼間よりも雪質が良い、景観が幻想的など）という環境条件の相違がある。また、班別実習の合間あるいは直後に行われる「フリー滑走」と、班別実習終了後に一定時間間隔をとった後の「ナイター滑走」では技術的な実感の相違が生じると考えられる。これらの点が影響し、「ナイター滑走」は授業づくりのポイントも良く整えられた形となり、実習後に高い評価結果がみられたと考えられる。

また、「バジテスト」については上級群のみに高い評価がみられた。これは、あらかじめ上級群においてはバジテスト受験を履修目的とした受講生がいたとともに、バジテスト受験は上級群と中級群の一部のみが技術レベルに相当する学生であった点に主に起因すると観察される。さらに、「バジテスト」は実習における最後のプログラムとして位置しており、技術的成果を班指導者以外の第三者におよる客観的評価を受けられる唯一の機会である。したがってバジテストを受験した受講生は、それを実習の総まとめとした充実感・達成感が加わったことと推測される。これらの要因から、上級群のみで「バジテスト」が高い評価を得られたと考えられる。

## 3) 技能群別の授業評価

5観点構造からなる授業評価については、初級群が「楽しさ」「成果」「仲間」の観点において極めて高い評価がみられた。初級者群は初めてスキーを経験した者が多く、不安が大きかったと推測される。しかしスキーには、①多様な楽しみができる、②上達が早くその進歩が楽しめる、③年齢・性別に関係なく楽しめる、という種目特性<sup>18)</sup>がある。このことから宇土<sup>14)</sup>が挙げている運動の楽しさである、「新しくできるようになった、活

動自体の楽しさ、他人との競争、困難への挑戦、仲間や指導者との協力・同調、あるいは不安の克服などが初級群は他の技能群と比べて強く実感できたため、「楽しさ」「成果」「仲間」の高い評価に影響を及ぼしたと考えられる。さらに現在、全日本スキー連盟が定めるスキー教程実技展開の運動の質においては、「セーフティ→コンフォート→チャレンジ」へと展開し、発展技術の教程が示されている<sup>17)</sup>。その過程が示すように安全確保から快適な移動に移行し、技術を駆使しさらに挑戦していくという課程を初級群が最も体感しやすかったと考えられる。また、初級群ならびに中級群で「体験スキーツアー」プログラムの評価が高かった。このプログラムは上級者、中級者、初級者の組み合わせにてグループ編成し行われるプログラムである。したがって初級群ならびに中級群の受講学生にとっては、困難への挑戦という側面もあるものの、「仲間」の評価が高かったことから示唆されるように、技術差のある者達の集団で行動したことが、技術レベルの低い者にとっては大いなる刺激を受けたとともに、協力・同調意識が芽生えたことが高い評価につながった大きな要因と推察される。

#### 4) 受講学生と指導者の授業評価とその関連性

5 観点構造からみた受講学生と指導者の評価については、「成果」において上級群と比較して中級群および初級群で相関がやや弱い傾向にあった。上級群ではその多くがバッジテストを受験し、受講学生ならびに指導者ともに最終的な技術達成の成果を第三者評価によって語る事ができた。したがってバッジテストの結果によって技術目標の成果が確認される機会が設けられている形になっていた。しかし、バッジテスト受験者が少ない中級群および初級群にとってはそれに相当するプログラムはない。そのため、中級群および初級群の「成果」評価基準については、受講学生は自己評価、指導者は実習展開に対する自己反省および受講学生の達成度評価、が中心になっていると推測される。そのため、中級群および初級群の受講学生は自分たちの自己評価として、大いに満足したという評価を示したが、それに対し指導者

は若干低い評価であった。これは指導者が受講学生に対し、より高い技術レベルを習得させることを目指していたことが一要因として推察される。

初級群は滑ることができない状態から開始しているが、「楽しさ」「仲間」評価の高さが示すように、その不安からできるようになった喜びをお互いに歓声や拍手などで大きく表現されていたことが推測され、指導者もその変化を容易に感じることができ、学生同様に各観点の評価が高く、相関も強くみられたと推察される。一方、中級者群においては、ある程度の技術を持っているために初級群ほど大きな反応が表現されなかったことが推測される。つまり淡々と実習が行われ、指導者にとっては初級群に比べると大きな手応えを感じられなかったことが予測され、「指導者」「仲間」の評価があまり高くみられなかった一要因と推察される。しかしながら、中級群の受講学生には「指導者」「仲間」観点で非常に高い評価がみられたため、指導者とは大きな隔たりがみられる結果となった。この点については、授業運営を重視する指導者と、様々な環境条件などを加えて評価する学生の、視点の相違が影響したと考えられる。良い体育授業を実現するために、高橋<sup>9)</sup>は、基礎的条件(授業のマネージメント、学習の規律、授業の雰囲気)と内容的条件(目標・内容・教材・方法の計画と実行)の二重構造によって成り立っているとし、特に広い空間で活発な身体活動を伴って行われる場合は、強く基礎的条件が授業成果に影響を与えている。まさに中級群および初級群にとっては良い実習を実現するうえで周辺的条件ともいわれる基礎的条件に大いに恵まれたと考えられ、上級群のように第三者評価が示される機会が無くとも充実した実習が展開され、各観点ごとの結果が示すような高い評価が与えられたと推察される。しかし、指導者にとっては実習を進めるうえでは中心的条件ともいわれる内容的条件に対して反省することに重点が置かれ、大きな反応が見えにくかった中級群では評価に隔たりが生まれた一因になったと考えられる。これらのことより、特に中級群では、受講学生の技術的目標レベルと指導者の目標レベルを明確化してその方向

性を確認・一致させる事が必要であり、上級群のように実習成果が学生と指導者の両者に客観的評価方法として表れるようなプログラムの工夫が求められる。

## V 結 語

本研究は、J大学スキー実習科目を対象に、実技実習科目における受講学生と指導者による双方の授業評価について調査分析し、実技実習科目の指導についての検討を試みた。その結果、次の知見が得られた。

1) 本調査において受講学生が履修目的として挙げた理由は、スキー活動の内容そのものへの動機であり、体育学習においては非常に望ましいものであった。そこには選択制授業の意義が大きく反映された結果であることが示唆されており、調査対象とした実技実習形態は、体育学習を行ううえで、望ましい受講目的をもった受講学生によって構成されやすいと考えられる。

2) プログラムに対する評価は、実習前の期待と実習後の評価では異なる傾向にあった。特に実習後は、大学生としての学習欲求を満たす形態での班別実習プログラムや、魅力ある授業づくりの誘引性やポイントが整えられた自由学習プログラムに対する評価が高い結果がみられた。したがって、大学生の特性を考慮し、それに応じたプログラム作成を行うよう工夫するとともに、各プログラム内容については実習前に十分理解させる必要性がある。

3) 技能群によって各観点ごとの評価に若干の差がみられ、特に初級群では「楽しさ」「成果」「仲間」の評価が高かった。今回の研究法では技能群によって評価に差がみられた詳細な理由を言及することは難しいが、同じプログラムであっても各技能群に合わせた内容に工夫する必要性があると考えられる。

4) 受講学生と指導者との各観点を評価については、中級群が他の技能群にくらべてその相関がやや弱い傾向にあった。今回の研究対象とした実習では、特に中級群において指導者と学生の目標設定の確認・一致を検討する必要性が示唆された。

## 参 考 文 献

- 1) 平野智之, 福島邦男, 野沢 巖: 大学スキー授業における選択制の有効性に関する事例的研究—平成10年度埼玉大学教育学部集中講義「スキー」を例として—, 埼玉大学紀要 教育学部 (教育科学Ⅱ) 第49巻第1号, 39-44, (2000)
- 2) 細田朋美, 杉原 隆: 体育授業における特性としての目標志向性と有能さの認知が動機づけに及ぼす影響, 体育学研究 第44巻第2号, 90-99, (1999)
- 3) 伊藤豊彦: 小学生における体育の学習動機に関する研究—学習方略との関連および類型化の試み—, 体育学研究 第46巻第4号, 365-379, (2001)
- 4) 順天堂大学: 平成13年度スキー実習手帖, 1-2, (2000)
- 5) 加藤一夫, 教職実務研究会: 魅力ある授業づくりハンドブック, 河野重男監修, 40-45, 学陽書房, (1994)
- 6) 文部省: 中学校学習指導要領, ぎょうせい, 東京, (1998)
- 7) 文部省: 小学校学習指導要領, ぎょうせい, 東京, (1998)
- 8) 高田俊也, 岡沢祥訓, 高橋健夫, 鐘ヶ江淳一: 体育授業改善のための基礎的研究—体育授業における新しい授業評価法の作成—, 高橋健夫代表, 文部省科学研究報告書, 172-182, (1991)
- 9) 高橋健夫: 体育の授業を創る, 16-18, 大修館書店, (1994)
- 10) 高橋健夫, 長谷川悦示, 刈谷三郎: 体育授業の「形成的評価法」作成の試み—子どもの授業評価の構造に着目して—, 体育学研究 第39号第1号, 29-37, (1994)
- 11) 高橋健夫, 鐘ヶ江淳一, 江原武一: 生徒の態度評価による体育授業診断法の作成の試み, 奈良教育大学紀要 第35号, 163-180, (1986)
- 12) 高橋健夫, 岡沢祥訓, 中井隆司, 芳本 真: 体育授業における教師行動に関する研究—教師行動の構造と自動の授業評価との関係—, 体育学研究 第36巻, 193-208, (1991)
- 13) 宇土正彦: 体育科教育法, 94, 大修館書店, (1978)
- 14) 宇土正彦: 体育授業の系譜と展望, 33-38, 大修館書店, (1986)

- 15) 海鋒修：大学生のスキーの導入，新体育 第49巻第9号，80-82，(1979)
- 16) 浦井孝夫：新・学習指導要領での高等学校選択制授業はこうなる，学校体育 第52巻第3号，16-19，(1999)
- 17) 財団法人全日本スキー連盟：日本スキー教程—実技指導編一，第2版，22-25，スキージャーナル，(1999)
- 18) 財団法人全日本スキー連盟：初級スキー教本 楽しいスキー，第12版，10-14，スキージャーナル，(1999)

(平成13年12月6日 受付)  
(平成14年2月13日 受理)